

愛知県立芸術大学法隆寺金堂壁画模写 —開学初期における日本画専攻の美術教育と模写事業について—

The report of the reproduction of mural painting of Kondo of Horyuji Temple of Aichi University of the Arts :
On the project of reproduced painting and art education of department of Japanese painting in early
years of the foundation of Aichi University of the Arts

金子明代

KANEKO Akiyo

Aichi University of the Arts has been engaged in the reproduction projects of national treasure since 1974, that a few years after Aichi University of the Arts was founded in. The projects began with the reproduction of 12 walls of mural painting of Kondo of Horyuji Temple by Tamako Kataoka who was the first professor at department of Japanese painting. In this research I will try to position this reproduction project as one tributary of art education since modern times. Especially on 10th Wall, which was reproduced first, I will examine the supposition that Tadashi Moriya was indispensable for the realization of this project.

はじめに

愛知県立芸術大学では、開学間もない昭和 49（1974）年より現在まで国宝や重要文化財に指定されている古典絵画の模写事業を実施している。その始まりは、美術学部絵画科日本画（現日本画専攻）初代教授片岡球子の発案による《法隆寺金堂壁画》の模写の着手にある。金堂の外陣を飾る大壁 4 面と小壁 8 面の計 12 面の原寸大の模写は、完了まで 14 年の歳月がかけられた。この事業は、その後も国宝級の古典絵画の模写事業として継続し、平成 29（2017）年 3 月までに 62 点の完成をみている¹。日本美術史を代表する複数の古典絵画の模写に長きに亘り取り組めた所以は、原本の姿をあるがままに写し取ることを第一に取り組んできた実績が高く評価されてきたためである。この事業によって完了した模写作品数や、蓄積されてきた模写の手法、保たれてきた高い質は、近年、愛知県立芸術大学の芸術教育の一つの成果として紹介されている²。

しかしながら、その成果に反し、この事業の実現に至った過程や発案の背景については、不明な点が多い。特に、その原初たる《法隆寺金堂壁画模写》の解明は不可欠であるものの、初期の模写事業に関する文書や記録類は、学内外の関連部署が多岐にわたることや大学の法人化に伴う組織体制の異動、本事業に関する記録を蓄積しようというそもそもの意思の欠如によって、資料の所在どころかその有無すら定かでない状況にある。そのため、本事業の契機に触れる言及は、主に模写制作に携わっ

た者たちによる極めて簡潔な言及に依拠してきたといえる。

《法隆寺金堂壁画》は、日本絵画の嚆矢であるとともに火災という災害を経験した象徴的な存在である。複数の模写が遺されているが、その制作は大掛かりであり、開学から日の浅い大学の一研究室がこの記念碑的大作の模写に着手できたことは、特筆に値する。拙稿では、愛知県立芸術大学が《法隆寺金堂壁画》の模写に取り組むに至った経緯について考察する。愛知県立芸術大学の《法隆寺金堂壁画模写》が先例の模写に倣った上で成立したものであること、また教育・研究機関における模写として学生への芸術教育を第一に取り組みられたものであることを、《法隆寺金堂壁画模写》の制作年代に比較的近い時期に作成された関連資料を交えながら解明することを目指す。

1. 模写開始の契機について

愛知県立芸術大学の法隆寺金堂壁画模写展示館には、《法隆寺金堂壁画》の模写 12 点が常設展示されている。大壁である 1 号壁釈迦浄土図、6 号壁阿弥陀浄土図、9 号壁弥勒浄土図、10 号壁薬師浄土図の模写【図 1, 4】は、縦 310.0～314.0cm、横幅 264.0～267.0cm で、小壁である 2 号壁半跏思惟菩薩像、3 号壁観音菩薩像、4 号壁勢至菩薩像、5 号壁半跏思惟菩薩像、7 号壁聖観音菩薩像、8 号壁文殊菩薩像、11 号壁普賢菩薩像、12 号壁十一面観音菩薩像の模写は、縦 309.0～315.0cm、横幅 155.0～159.0cm の寸法を持つ、和紙上に再現された原寸大の復元模写である。

この《法隆寺金堂壁画》の模写制作は、美術学部絵画科日本画（現美術科日本画専攻）の初代主任教授片岡球子の主導により、昭和 49（1974）年 4 月に開始された。本事業を企画した片岡は、模写開始から 11 年の後、《法隆寺金堂壁画》の模写を始めた経緯について、かねがね教材用の模写の手本が極めて少ないのを何とかしたいと考えていたところ法隆寺の壁画模写を制作することができる大学の研究棟が完成し、これを契機に《法隆寺金堂壁画》のコロタイプ 12 点を京都・便利堂から購入、同じく朝日新聞東京本社から寄贈され、守屋多々志を中心に制作に着手したと述べている³。開学当初から日本画教員であった布施伸介や 6 号壁と 2 号壁の模写に参加した秦誠もまた、壁画模写開始の契機について片岡の発言に則った言及を行っており、布施は開学後日も浅く芸術大学として教えるのに必要な「教育参考品」の不足を解消することが模写事業に着手する発端であったとしている⁴。すなわち、愛知県立芸術大学の《法隆寺金堂壁画模写》は、学生の芸術教育の参考になる資料、具体的には教材である「模写の手本」として企画されたものであることが読み取れる。

ファイル『教育参考品関係綴／教育参考品購入計画書／昭和 48 年度～昭和 60 年度』（A4 判、紙ファイル。以後、『教育参考品関係綴／昭和 48～60 年度』。）内に綴じられた昭和 47（1972）年 9 月 27 日作成と推測される第一回「教育参考品購入委員会」の議事録には、日本画研究室から《法隆寺金堂壁画》の模写を行いたい旨の申し出を受けた教育参考品購入委員会が片岡に計画について確認の様子が残されている⁵。教育参考品とは、美術教育において専門の技術と知識を教授するためには、講義や実習だけでなく、広く古今東西の作品を鑑賞して鋭い審美眼と豊かな想像力を養うことが必要であり、多くの優れた作品を身近に置き学生の利用に供することが最善であるとの考えから購入された第一級の作家の作品や教育の参考になる資料を指す言葉である⁶。購入第一弾のブルーデルからファッツィーニ、マンズー、藤田嗣治など現在では愛知県立芸術大学の芸術教育の根幹を成すコレクションとなっている。特別な予算を組み昭和 43（1968）年度から順次購入されている教育参考品の、以後の購入計画のために組織された教育参考品購入委員会の初代のメンバーには、

学長以下、美術学部長、教授陣、事務局長らが名を連ねている⁷。

その議事録によると、模写を行うにあたり便利堂に残っている《法隆寺金堂壁画》の原寸大複製を購入したいこと、その購入費用のうち一部は日本画研究費より拠出しても構わないこと、模写を行うにあたって日本画の教員と学生で行いたいこと、非常勤講師の守屋多々志、月岡米貴を主任に昭和43(1968)年に完成した《法隆寺金堂壁画模写》(以後、《再現壁画》)に従事した東京芸術大学の先生に応援を頼みたいと考えていること、そのために現在招いている評論系の非常勤講師5名をこの模写にあたる6名ほどと替えたいことが片岡より説明され、委員会として原寸大複製の購入を承認したことが記されている。

同ファイルには、昭和47(1972)年8月10日付便利堂発行の「見積書」2枚と日本画研究室の署名が入った昭和47年9月付資料「法隆寺金堂壁画模写実費」(A3判、1枚)が残されており、便利堂から購入する予定の「法隆寺金堂壁画原寸大複製一揃」が「和紙コロタイプ印刷」であること、参考資料として「原色版12枚10組」の購入も検討していることが確認できる。

それまで、学生の芸術的な感性を養うために素材や技法、表現を外から鑑賞、研究することができる作品を購入していたのに対し、この模写制作は、学生が鑑賞、研究することができる作品を自らの手で創り上げ、その過程で研究したことを学生の指導へと還元することを企画するものであった。開学から数年が経ち各専攻とも芸術教育のさらなる充実を図る中で、教育参考品という言葉を広義に捉え、教材用の模写手本の不足を解消するためにその制度を自分たちの問題へと引き寄せ、必要な材料費や人件費などの費用へと置き換える斬新な計画であったといえる。

2. 模写の実現と守屋多々志

ファイル『教育参考品関係綴／昭和48～60年度』には、上記の「見積書」2枚と資料「法隆寺金堂壁画模写実費」の後に続けて日付なし資料「模写担当教官」(A3判、1枚)が綴じられている。ここに示される表によると、模写担当教官として、日本画研究室の全教官片岡、布施、小山硬、日置宏輔、田淵俊夫とともに非常勤講師の守屋と月岡の名前があり、守屋の名前の前には丸印が付されている。

芸術資料館内に保管されているファイル『法隆寺金堂壁画模写関係資料』(B5判、紙ファイル)内の、朝日新聞東京本社企画部長坂崎太郎氏から愛知県知事桑原幹根氏に宛てた昭和48(1973)年7月1日付「寄付書」には、《法隆寺金堂壁画》のコロタイプが同社から愛知県立芸術大学へ寄付されたことが記されている。同「寄付書」内には「1. 題名 法隆寺金堂壁画(焼失前のもの)の写真版をコロタイプ印刷したもの」、「1. 寸法 大壁4面、小壁8面 計12面(コロタイプ印刷したもの370枚)」、「1. その他 昭和42年から43年にかけて法隆寺金堂壁画再現委員会が行った再現事業の際、特に注文して印刷させたものの一部」とあり、寄付されたコロタイプ印刷が昭和42年に開始された再現壁画事業のために焼損以前に撮影された《法隆寺金堂壁画》のコロタイプ版を印刷したもの的一部分であることが分かる。

同ファイル内の「中国六朝時代の窟院には」から始まる日付なし資料(B5判、2枚)によると、「朝日新聞社では本学の守屋教授が当時の模写担当者の一員であり、かつ法隆寺金堂壁画模写の意向のあるのを仄聞し、保管されていた1組のコロタイプ版…(中略)…の寄贈を本学に申入れた。」とあり⁸、守屋の存在によって愛知県立芸術大学が朝日新聞社のコロタイプ印刷を入手できたことが記されている。

この「当時の模写」とは、上記「再現壁画事業計画」を指す。昭和24(1949)年1月26日未明に金堂で発生した火災は壁画に甚大な被害を与えた。焼損した壁画は壁ごと金堂から外され新たな収蔵庫で管理されることとなる。一方、金堂外陣の壁面は、昭和29年11月に金堂の昭和の大修理が落成した後も白壁のままであった。この外陣の壁面に焼損前の状態を再現した新たな模写を納める計画が昭和41年に朝日新聞が提案した「再現壁画事業計画」であり、この模写制作にあたる日本画家として選出された14名のうちの一人が守屋であった。14名はそのうちの安田鞞彦、前田青邨、橋本明治、吉岡堅二が主導する4班に分かれ、3壁ずつ模写を制作した⁹。守屋は近藤千尋や平山郁夫とともに前田班に所属し、担当する10号大壁、3号小壁、12号小壁のうち10号壁の模写を青邨とともに担当している。青邨によると、重要な顔面やすべての描き起しは自身が筆を執ったものの、10号壁の制作は守屋が主に努力し、月岡や蓮尾辰雄がその助手となったという¹⁰。

この前田班の画家たちは、後の昭和47(1972)年10月に開始された文化庁委嘱《高松塚古墳壁画模写》にも参加している。総監修である青邨の呼びかけにより集められた画家たちは、広く一般への公開が困難な壁画の発見時の姿を記録し、公開に資することを目的に、眼前にない作品の忠実な模写の制作にあたった。平山が西壁女子群像を、守屋が東壁女子群像を、月岡が西壁男子群像を、近藤が東壁男子群像を、今井珠泉が西壁月輪白虎を、蓮尾が東壁月輪青龍を、若林卓が北壁玄武を担当しており¹¹、今井はこの人選が青邨の門下生60数名の中から行われたものであり、自身は青邨より直接に参加の指示を受けたと述べている¹²。

このうち平山と若林以外は、後の愛知県立芸術大学の《法隆寺金堂壁画模写》にも携わっている。国を代表する大きな模写を担当した実績を持つ彼らを愛知県立芸術大学に招くことができたのは、青邨と片岡との関係があったものと思われる。学内での模写事業を発案した片岡は、愛知へ赴任した経緯を青邨からの打診であったと述懐している¹³。また、桑原幹根愛知県知事は、定例県議会で愛知県立芸術大学創設に際し優れた教授陣を確保できるのかとの質問を受け、日本画の教授について青邨に推薦を依頼していることを答弁している¹⁴。青邨の弟子で模写に長けていた守屋らは、愛知県立芸術大学の《法隆寺金堂壁画模写》の計画がまだ立ち上がっていなかった開学当初から非常勤講師として招かれており、そのことが愛知県立芸術大学の模写事業の実現へと繋がったものと思われる。

守屋が愛知県立芸術大学日本画研究室で非常勤講師として教鞭を執ったのは、《再現壁画》に従事するのと同時期である¹⁵。開学年にあたる昭和41(1966)年と翌42年の非常勤講師に関する記録は欠くものの、美術学部で保管されている綴『教授会関係綴』(B5判、黒表紙紐綴、背表紙に「教授会関係綴42～43」とあり)内の資料により、昭和43年度の守屋の担当科目や時間が確認できる。昭和43年3月29日開催美術学部教授会開催通知内の、議題「時間割の承認について」添付資料「昭和43年度1年次」「昭和43年度2年次」「昭和43年度3年次」(B4判、各1枚)は、昭和43年度における日本画、油画、彫刻、デザインの1年次から3年次の授業の年間の時間割を記したものであり、日本画では「古典衣装」や「模写」と冠する授業を3年次の4月前期第3週と1年次から3年次の11月後期第7週から9週に開講する予定であることが分かる。

これらの授業を担当した教員は、昭和43(1968)年6月5日開催美術学部教授会資料内、議題「非常勤講師の予算について」の添付資料である最上段に「日本画科」と記された資料(B4判、1枚)の表にみる授業内容「古典衣装模写」や講義月日「4/22～27」「11/11～15」「11/18～23」「11/25～29」などの記載から、守屋であった蓋然性が高い。その総時間数は134時間に及び、以後も44

年度は 136 時間、45 年度は大学院 80 時間を含む 200 時間、46 年度は 132 時間、47 年度は 112 時間と日本画研究室の他の非常勤講師と比べて破格に長時間の指導を依頼し、講義のたびに鎌倉より招いていたことがうかがえる¹⁶。

この守屋による授業の痕跡が、現在芸術資料館に収蔵されている「模写手本」と分類される一群の模写に遺されている。これらは、《扇面古写経》や《過去現在絵因果経》、《伴大納言絵詞》などの古典絵画の模写であり、細部まで丁寧に彩色されたものから淡色で全体の着彩の雰囲気のみを大まかに写したもので精度の異なる模写を含む。学生が制作する模写の手本とすることを目的に守屋や月岡、蓮尾、今井らの手によって制作されたものであり、昭和 43（1968）年 3 月から定期的買い出し、教材の充実を図っていた様子が見られる¹⁷。それらのうち最も早い模写手本が、昭和 43 年に制作されたとする記録を持ち、同年 3 月 30 日までに研究室への受入が行われた《法隆寺金堂壁画》と《扇面古写経》の模写である。このうち《法隆寺金堂壁画》の模写手本は、6 号壁の阿弥陀 3 点と観音菩薩 2 点、勢至菩薩 2 点、10 号壁の日光菩薩 1 点を守屋が、同壁の日光菩薩 2 点と月光菩薩 2 点を蓮尾と月岡が制作したものであり、彩色に若干の差異がみられるもののそれぞれ尊像の頭の先から胸を中心とした同一構図を切り取った同一の模写手本を複数用意していたことがうかがえる。これらの模写は、3 者が《再現壁画》に従事している時期に制作されたものであり、《再現壁画》の担当壁とは異なる壁面の模写も含まれるものの、その経験の上に制作されたものと思われる。

昭和 43（1968）年度の日本画研究室の非常勤講師には、守屋を含め 4 名の名が挙げられている。箔絵指導者、紙裏打指導者の他、材料研究の担当として名古屋大学から山崎一雄が招かれている¹⁸。山崎は《法隆寺金堂壁画》の顔料に関する研究を焼損前後に行っており¹⁹、実技とともに、最新の科学的な研究成果に触れることができる環境を整えていたことがわかる。日本画研究室は、その技術や精神性を学び、創作に活かすことを目的とした模写の、第一に取り組むべき作品として《法隆寺金堂壁画》を選択していた。守屋を中心に制作されていた模写手本は、昭和 49 年 3 月 25 日を最後に受入が途絶えている。一定数の模写手本が整ったこととともに、同年 4 月から始まる愛知県立芸術大学の《法隆寺金堂壁画模写》へ組織体制や教育的役割が移行したと思われる。

3. 愛知県立芸術大学法隆寺金堂壁画模写と再現壁画

模写の方法は、守屋が参加した《再現壁画》の方法が踏襲された。コロタイプ印刷した和紙を繋げた原寸大複製を木枠に張ったものを素地とし、その上に岩絵具をふす方法である。もう一組のバラのコロタイプ印刷は、模写の上に置かれ、その残像を目に焼き付けて描く「下げ写し」という方法で活用された²⁰。

愛知県立芸術大学が入手した 2 組のコロタイプ印刷は、それぞれ異なる形状で納められた。昭和 47（1972）年 8 月 10 日付便利堂発行「見積書」の備考欄には、項目に含まれる「仕上代」が「ツギ合わされた各刷本の調子を均一化するための作業」であることが記載されており、《再現壁画》においておおそ大壁で 44 枚、小壁で 24 枚であったコロタイプ印刷²¹を壁面ごとに接いだ状態で納品されたものと推測される。

一方、昭和 48 年 7 月 1 日付朝日新聞東京本社発行「寄付書」には、計 12 面のコロタイプ印刷は「370 枚」とであると具体的な枚数が明記されている²²。現在芸術資料館に収蔵されている壁面ごとにクラフト紙にまとめられたバラのコロタイプ印刷がこれにあたる。同封された紙片には「朝日新聞

社より」などの速筆とともに、「1-1」、「1-2」、「1-3」、…「6-7」などの番号が記載された紙片が含まれているものがある。これは、縦60cm、横48cmほどのコロタイプ印刷が1段目から6段目まであり、一段につき7枚のコロタイプ印刷に分割されていることを示している。さらに、本尊や観音の顔を中央に捉えたコロタイプ印刷が加わり、6号壁と10号壁のコロタイプ印刷は44枚、1号壁は43枚、2号壁や12号壁は25枚に及ぶ²³。向かって右上から振られたこの番号は、コロタイプ印刷の和紙の余白にも鉛筆で付されており、番号を確認しただけで壁面のどのあたりのコロタイプ印刷であるか確認できるようになっていた。また、第一に取り掛かった10号壁の1段目と2段目のコロタイプ印刷は上下左右を貼り合わされており、添えられている紙には「48.11.16日 非常勤講師寺内洪先生渡し 1-1、1-2、1-3、…(中略)…2-7 計14枚」とある。初めて取り掛かる大壁模写への試行錯誤の痕がみえる。《再現壁画》では、岩絵具を重ねていくにつれて見えなくなってくるコロタイプ印刷の線を探し描くために、予備のコロタイプ印刷が参考になったといい、寄贈されたコロタイプはこうしたものの一部であった可能性がある²⁴。

その受入は、昭和47(1972)年12月9日と翌48年1月8日、同年1月24日と3期に分けて1号壁から5号壁、10号壁から12号壁、6号壁から9号壁の順に行われているが²⁵、愛知県立芸術大学の《法隆寺金堂壁画模写》は、《再現壁画》において守屋が担当したために10号壁から開始されている²⁶。

ファイル『法隆寺金堂壁画模写関係資料』内の、左上に「事業名『法隆寺金堂壁画模写委託費(特別経費)』」とある資料(B5判、1枚)は、「53要求額」との記載があり、10号壁の最終年度である昭和53(1978)年度のための予算要求資料と思われる。ここに示される表の「全体計画及び実績」によると、模写作業は初年度49年度に「地壁作り(剥落写し。主として白黒)」、2年目も「〃(〃黄赤)」、3年目に「下塗(人物に対する下塗)の80%以上」、4年目に「下塗の一部及び全画面の着色(人物の着色)」、5年目に「全画面の着色(線描、その他)、終了」とあり、地壁すなわち素地である和紙上にあたかも白土壁が存在するかのよう丹念に描き、さらにその上に如来や菩薩、神将の輪郭線や塗り、暈しなどの描かれた彩色を再現する様子がかがえる。吉田班として2、6号壁に参加した秦によると、班による違いはあるものの、「先ず、コロタイプの上に胡粉と方解末を全面に塗り、次に細かい点状になっている白壁部分を胡粉の点描で塗っていく」方法であったという²⁷。胡粉と方解末については、原画である《法隆寺金堂壁画》には使用されていないものの、彩色の再現として有効である場合使用されている²⁸。

そうして作られた地の上に表された尊像もまた、何度も筆を重ね描き出されており、原画の細部に及ぶまで再現がなされている。向かって右下の金剛力士の顔の髭などは、細く長い毛の一条まで正確に表されている【図2】。

法隆寺金堂内陣の《飛天図》の復元模写を行った林功の論文には、愛知県立芸術大学の《法隆寺金堂壁画模写》12面が完成した後に行われた座談会の記録が「法隆寺金堂壁画模写担当者座談会」として収録されている²⁹。この論文内の記録は、紙面の都合により記録の一部を抜粋したとの注記があり、その抜粋前の記録が「完全版」として、ファイル『法隆寺金堂壁画模写関連資料』の中に保管されている。その中で月岡は、《再現壁画》においては各画家の考えが絵に組み込まれたものの、今回の模写では一切の恣意的な判断を省きありのままを写すことを目指したと触れている。

《再現壁画》は、「焼失前の壁画にないものを描き加えない」ことを方針の一つに、焼損直前の

状態を忠実に再現することを目標に制作された。同時に、総監修であった青邨が主導した10号壁は、「原画の美しさの再現」を目指し、向かって右側の脇侍菩薩の右手先と胸の部分など壁体ごと剥がれ落ちた箇所を、平木氏所蔵の鈴木空如の模写を参考に復元的に描いたと述べている³⁰。昭和42（1967）年6月26日、27日には焼損以前に制作された空如の模写や《昭和の模写》8面を東京国立博物館に集めて制作画家たちが展覧しており³¹、《再現壁画》の参考とされた。愛知県立芸術大学の10号壁模写において同場面は、コロタイプ印刷の通り壁体が剥がれ藁スサが露出した状態が再現されている【図3】。

模写作者もまた、《再現壁画》と同様に監督者と担当者、助手からなる班単位で一つの壁面を担当した。【表1】は、ファイル『法隆寺金堂壁画模写関係資料』内の、日付なし資料「愛知県立芸術大学日本画法隆寺金堂壁画模写実施要項」（B5判、1枚、両面）と日付なし資料「愛知県立芸術大学日本画法隆寺金堂壁画模写実施経過」（B4判、1枚、両面）の年表と、昭和62（1987）年9月に愛知県立芸術大学が発行した冊子『法隆寺金堂壁画模写―収蔵資料館設立企画案―』³²と、翌63年発行の愛知県立芸術大学《法隆寺金堂壁画模写》の完成報告書『愛知県立芸術大学法隆寺金堂壁画模写』³³を参考に、各壁面を担当した人員を列記したものである。上記資料「実施要項」は57年4月の事項が最後の事項であり、上記資料「実施経過」は「実施要項」に57年5月以降59年4月までの事項を加えたものである。ともに、最後の事項が記載されている時期に作成された資料と思われる。また、59年5月以降は、上記冊子の情報に基づく。この3点の資料に出てこない助手の名前を、完成報告書より抜粋した。

【表1】法隆寺金堂壁画模写制作年次及び制作者一覧

作品名	制作年（単位：年度）												制作者（人員の中途参加、中途離脱は問わず）		参考		
	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62		担当者	助手
10号大壁模写															守屋多々志、蓮尾辰雄、近藤千尋、藤田高日子	白井治、千村俊二、水野一昭、渡辺美喜	資料「愛知県立芸術大学日本画 法隆寺金堂壁画模写実施要項」
3号小壁模写															蓮尾辰雄、近藤千尋	佐藤啓美、渡辺美喜、島田隆司、日景博、辻茂樹	資料「愛知県立芸術大学日本画 法隆寺金堂壁画模写実施経過」
6号大壁模写															吉田善彦、田中穰、戸塚和郎、伊藤篤夫	河合重政、星野哲弘、角島直樹、松村公嗣、秦誠	
4号小壁模写															月岡栄貴、山中雪人、後藤芳世	千村俊二、白井治、熊原清久、渡辺聖仁	
12号小壁模写															蓮尾辰雄、近藤千尋	佐藤啓美、渡辺美喜、島田隆司、辻茂樹	
2号小壁模写															吉田善彦、田中穰、戸塚和郎、伊藤篤夫	河合重政、星野哲弘、角島直樹、秦誠	資料「愛知県立芸術大学日本画 法隆寺金堂壁画模写実施経過」
11号小壁模写															月岡栄貴、山中雪人、後藤芳世	千村俊二、白井治、熊原清久、渡辺聖仁	
9号大壁模写															月岡班（月岡栄貴、山中雪人、後藤芳世）	[59年4月8号小壁、9号大壁 助手新規] 吉田班：下川辰彦 月岡班：木村恵子、金子美奈、山田隆量、宮尾睦、塚本敬清	資料「愛知県立芸術大学日本画 法隆寺金堂壁画模写実施経過」
8号小壁模写															蓮尾班（蓮尾辰雄、近藤千尋）	蓮尾班：神保栄、浅島裕志、伊藤一善、並木功、桑原裕子、後藤嘉寿美	冊子『法隆寺金堂壁画模写―収蔵資料館設立企画案―』
1号大壁模写															吉田班（吉田善彦、田中穰、戸塚和郎、伊藤篤夫）		愛知県立芸術大学『愛知県立芸術大学法隆寺金堂壁画模写』愛知県立芸術大学、1988年
7号小壁模写															蓮尾班（蓮尾辰雄、近藤千尋）	[59年5月以降の助手] 阿部任宏、楚里清、高島弘紹、藤野直也、吉川優、永都康之、堀田淑支、阿部一雅、江川敦志、竹河友紀子、青木真沙子	
5号小壁模写															月岡班（月岡栄貴、山中雪人、後藤芳世）		

3号壁以降、班制が導入され、班の担当者は固定し、助手が入れ替わっていたことが分かる。担当者には、主に《再現壁画》に従事した画家たちを、その助手には、愛知県立芸術大学日本画研究室の卒業生があてられた。9、8、1、7、5号壁の最終年度で、法隆寺金堂壁画模写が完了する年度にあたる昭和62(1987)年の9月に発行された冊子『法隆寺金堂壁画模写—収蔵資料館設立企画案—』によると、模写参加人数は延べ7330人であったという。当初予算が少額であったために一壁5年として始まった模写事業は、予算の増額とともに徐々に制作のスピードを上げている。人員を多く確保し平行して模写制作を実施できるようになっただけでなく、継続して取り組まれたことで模写制作への熟度が上がったこともその要因と思われる。国家規模の模写事業に関わってきた模写の第一人者たち指導者と、愛知県立芸術大学日本画研究室とで創り上げた模写であったといえる。

4. 法隆寺金堂壁画の象徴性と芸術教育

古典の名画や仏像の模写・模造は、近代以降の美術教育の中で大きな位置を占めてきた。明治維新後の廃仏毀釈の風潮を受けて高まった社寺が所有する古宝物類や社寺を保護する動きにより設置された博物館と、日本古来の伝統的な芸術観や技法に則った芸術家や美術教員の育成を目指した東京美術学校の設置とは、国策事業として複雑に絡み合って実施される。明治23(1890)年には、帝国博物館美術部長と東京美術学校長を兼務していた岡倉天心の発案によって「本館美術部ノ陳列品トシテ彫刻絵画ノ名品模造之儀ニ付伺」³⁴が提出され、帝国博物館での活用を目的に古典仏像や絵画の模造が東京美術学校に委嘱されている。これにより、明治23年から30年にかけて森川杜園や竹内久一による《九面観音像》や《執金剛神像》の模造や、横山大観や下村観山らによる雪舟筆《四季山水図》や《阿弥陀聖衆來迎図》の模写が制作されている。これらは模写・模造による研究や技術の向上が新たな創作を生む基礎となることを期待して教育に取り込まれたものであり、同時に、その教育成果を博物館に陳列し、「古大家ノ傑作」の代替として活用する構想であった³⁵。

《法隆寺金堂壁画》の模本は、江戸時代末より複数制作されたことが指摘されている³⁶。明治17(1884)年、京都の画工桜井香雲は、博物局の備品とするため模写を行った。同年7月12日の『法隆寺日記』には、香雲の「金堂内壁画残らず写し取り候事」は「日数五百日間も相掛かる様子なり」と記され、その模写にあたっては、堂内に足場を組み燈火で壁画を見ては壁に留めた模写紙に描く上げ写しが行われたという³⁸。天心は明治23年の東京美術学校での講義「日本美術史」で、この模写に触れている³⁹。安田鞞彦もまた、13才の頃東京国立博物館でこの模写をみたことが記憶に残っていたという⁴⁰。

東京美術学校の生徒として古美術研究に触れ、美術学校生への収蔵品の貸出を行っていた東京国立博物館が隣接する環境にあった鈴木空如は、明治30(1897)年代から昭和11(1936)年にかけて、3期にわたり3組の原寸大模写(大仙市教育委員会蔵本、鈴木壮治氏蔵本、平木浮世絵財団蔵本)を完成させている。東京国立博物館に保管されていた香雲の模写により構成線などを確認し、細部や色調を整え完成させるために50回も法隆寺へ足を運んだという⁴¹。これら《法隆寺金堂壁画》の模写は、昭和7年開催の「鈴木空如筆国宝名画模本展覧会」やその直後の『法隆寺金堂壁画模本展覧会』で国宝絵画の模写とともに公開されたという⁴²。

昭和15(1940)年より開始された《昭和の模写》は、《法隆寺金堂壁画》の保存を目的に国家が主導した大規模な模写事業であった。大正2(1913)年に天心が行った法隆寺の壁画保存に関する

る発議により、大正9年には調査・検討する委員会が『法隆寺壁画保存方法調査報告書』を刊行している。そこでは、「不慮ノ變災」や「自然的頽勢」に備え「我國唯一ノ名畫ニシテ完全ナル副本」を作成することの必要性が説かれており⁴³、昭和14年に設置された法隆寺壁画保存調査会により、「完全ナル副本」である〈昭和の模写〉制作が具体化する。昭和10年8月1日には、委嘱を受けた便利堂が75日間をかけて四色分解撮影を含む金堂壁画の原寸大撮影と赤外線撮影を行っており、この撮影によって作成されたコロタイプ版による全12壁の原寸大複製23組が、昭和13年までに国内外に頒布されている⁴⁴。翌14年には模写にあたる主任画家が選出され、中村岳陵、荒井寛方、入江波光、橋本明治の4名の主任画家に助手をつけた4班で分担制作を行っている⁴⁵。模写にあたっては、蛍光灯を導入した明るい堂内に櫓を組み、高知県産の和紙にコロタイプ版を薄く印刷したものを下図として、壁画を間近に見ながら時間をかけて実施された⁴⁶。

第二次大戦後に再開された模写制作の最中である昭和24(1949)年1月26日未明に起こった火災は、壁画の色彩を変色させただけでなく、6号壁の阿弥陀如来の頭部の壁体の破損など消火活動による二次的な被害を生んだ。保存を叫ばれてきた壁画の悲劇が与えた衝撃の大きさは、美術に関する研究誌や雑誌で直ちに組まれた特集が物語っている⁴⁷。そこに綴られた研究者や作家たちの嘆きや悲しみは壮絶で、喪失の大きさを生々しく伝えている。後に片岡が愛知県立芸術大学での模写実施を陳情する第一回教育参考品購入委員会の場に同席することとなる伊藤廉は、「所詮、何をいっても、もう駄目だという気がするのです。法隆寺は物ではないのです。あれは精神だったので。」と述べている⁴⁸。この時点でほぼ完成していた壁面は2、5、6、10号壁のみであり、中途まで制作していた壁面を残し、模写制作は未完のまま中断された。

昭和42(1967)年3月1日に模写制作が開始される〈再現壁画〉では、〈昭和の模写〉から吉岡堅二、橋本明治、吉田善彦、野島青茲、大山忠作らが壁画に近く接した経験をもって参加している⁴⁹。〈昭和の模写〉が堂内で行われたのとは異なり、模写制作は各画家の家で行われた。各班による複数回の法隆寺の見学や東京国立博物館で旧模写を集めた見学会、制作画家を集めた検討会などによって調整が図られていた。〈再現壁画〉は、わずか1年で完了し、翌43年2月29日には原寸大につなぎ合わされている。完成した壁画模写は、東京国立博物館、愛知県美術館、京都市美術館、福岡県文化会館で巡回展示され、11月には法隆寺金堂の白壁の上にパネル張りを取り付けられた⁵⁰。愛知での展示は8月3日から21日のあいだであり、守屋はその3か月後の11月に、日本画研究室で模写の指導を行っている。

〈再現壁画〉から数年後、日本画研究室が、特に模写の手本とする模写の題材と制作方法について検討を進めていたことが分かる資料がある。ファイル『教育参考品関係綴／昭和48年度～60年度』内、資料「資料館模写室計画表／日本画教材作成(6カ年計画)／昭和48年着手／但し資料館竣工次第実施のこと」(B5判、1枚)によると、教材として「1 日野法界寺 壁画(2点) 東京芸大所蔵 模本」と「2 浄瑠璃寺 吉祥天厨子絵(7点) 東京芸大所蔵 模本」の模写を「指導教員守屋正及び学生卒業生」らによって実施しようと計画していたことが分かる。しかしながら、これら〈法界寺壁画〉や〈浄瑠璃寺吉祥天厨子絵〉の模写手本の芸術資料館への受入記録はなく、その後の〈法隆寺金堂壁画模写〉に譲られたものと思われる。

同ファイル内、資料「総合研究棟模写室模写実施計画表(日本画研究室)／法隆寺金堂壁画12壁面作成／昭和49年4月総合研究棟竣工と同時に着手」(B5判、1枚)の表によると、昭和48年

頃に《法隆寺金堂壁画》の10号壁薬師浄土図の薬師如来や日光・月光菩薩、脇侍菩薩、羅漢らの「頭部」を寸法「各15号」で1部ずつ「総計18場面」を3年計画で模写することを検討していたことが分かり、当初は壁画に描かれた尊像の頭部を中心とした部分のみ模写する部分模写を計画していた可能性がある。愛知県立芸術大学《法隆寺金堂壁画模写》は、計画段階では学内教育の目的のみに特化した小規模な計画であったと思われる。それらは、準備を進め検討を重ねる中で整った人員や手段といった条件により、単なる教材で収まらないスケールへと拡大されたと考えられる。

おわりに

《法隆寺金堂壁画》は、高い芸術性を備えるとともに、日本絵画史上の本格的な絵画の始まりを告げる「我國唯一ノ名畫」である。その重要性にも関わらず見舞われた悲惨な運命も相俟って、つねに象徴的な存在であり続けた。その模写は多く残されているものの、愛知県立芸術大学《法隆寺金堂壁画模写》は、14年の歳月をかけ《再現壁画》の画家と日本画研究室によって取り組んだ全12壁の実寸大の模写である。一大学の研究室の取り組みとしては過大であり、その後の愛知県立芸術大学の古典絵画の模写事業継続という指針を決定づけた記念碑的な事業であった。愛知県立芸術大学《法隆寺金堂壁画模写》は、学生がその精神性をも学び得る忠実な模写として制作された、金堂壁画模写群の延長線上にある作品であり、焼損前の威容を伝える新たな模写の一つといえる。

註

- ¹ 《法隆寺金堂壁画》の模写を完成させた後、《高松塚古墳壁画》《京都国立博物館所蔵釈迦金棺出現図》《法隆寺金堂内陣壁画飛天図》《西大寺所蔵十二天像》《神護寺所蔵伝平重盛像》《神護寺所蔵伝藤原光能像》《神護寺所蔵伝源頼朝像》《神護寺所蔵伝文覚上人像》《東大寺所蔵俱舍曼荼羅図》《神護寺所蔵釈迦如来像》《奈良国立博物館所蔵十一面観音像》《法華寺所蔵阿彌陀三尊像》《東寺所蔵両界曼荼羅（伝真言院曼荼羅）》《金剛峯寺所蔵伝涅槃図》の模写に取り組み、完成に至っている。
- ² 学内における一般公開だけでなく、MIHO MUSEUM や古川美術館など、近年愛知県立芸術大学の模写に焦点をあてた特別展で展示される機会が増えていることは、その証左といえる。
- ³ 片岡球子「香流会日本画展—愛知芸大創立の頃」『三彩』458号、三彩社、1985年
- ⁴ 林功「愛知県立芸術大学蔵法隆寺金堂壁画模写についての考察—現状模写と復元模写—」『愛知県立芸術大学紀要』21号、愛知県立芸術大学、1992年、秦誠「法隆寺金堂壁画の「模写」」小倉一夫編『ミロク、甦る。織物となった古代オリエントの〈魂〉』MIHO MUSEUM、2013年。
- ⁵ 本資料はA4判用紙の罫線の外に「S47？」とのメモ書きがあるが、議事録とは別筆で、正確な開催年次の記載を欠く資料である。しかしながら、「9/27(水)」に開催されたとの記載から年次を限定することが可能であり、また昭和47年8月10日付の便利堂の見積金額を報告していること、また第3回の議事録に明年度として48年度があてられていることを勘案すると、第1回目の教育参考品購入委員会は昭和47年9月27日(水)に開催されたと考え得る。
- ⁶ ここに記した教育参考品の定義は、ファイル『教育参考品関係綴／教育参考品購入計画書／昭和48年度～昭和60年度』内の日付なし資料「教育参考品購入計画」(A3判、1枚)内の「1.理由」に依拠する。
- ⁷ ファイル『教育参考品関係綴／教育参考品購入計画書／昭和48年度～昭和60年度』内の9月27日と思われる第一回「教育参考品購入委員会」の議事録(A4判、1枚)による。
- ⁸ 本資料には、「昭和49年より10号壁に5年計画でとりくみ54年3月にはこれを完成し、つづいて3号壁を3年計画で完成したい予定である」とある。3号壁模写の途中で開始される4号壁や6号壁の模写に触れていないことから、10号壁模写の完成に近い54年3月頃から4、6号壁が開始される55年4月頃までに作成された資料である可能性がある。
- ⁹ 14名の日本画家と担当壁は以下である。
6号大壁、2号小壁、4号小壁 安田班(安田鞞彦、岩橋英遠、羽石光志、吉田善彦)

10号大壁、3号小壁、12号小壁 前田班（前田青郵、守屋多々志、近藤千尋、平山郁夫）

9号大壁、8号小壁、11号小壁 橋本班（橋本明治、野島青茲、大山忠作）

1号大壁、5号小壁、7号小壁 吉岡班（吉岡堅二、稗田一穂、麻田鷹司）

このうち、安田と前田が総監修を勤めた。その他、40人に上る制作助手があり、月岡や蓮尾辰雄、今井珠泉、田中穰の名が残されている（石田茂作、田中一松、松下隆章ほか編『金堂壁画再現記念法隆寺展』朝日新聞社、1968年）。

《再現壁画》については、田中一松「壁画再現の夢」（同前）による。

¹⁰ 前田青郵「壁画を再現して」（同前）。

¹¹ 文化庁美術工芸課「高松塚古墳壁画の模写と公開」『月刊文化財』1974年

¹² 今井珠泉が日本美術院HP内「同人コラム」に記している（URL http://nihonbijutsuin.or.jp/column/imai_shusen6.html）（最終確認日2018年1月9日）。

¹³ 前出「香流会日本画展—愛知芸大創立の頃」

¹⁴ 愛知県立芸術大学創立40年記念誌編集委員会『創立40年記念誌愛知県立芸術大学1966～2006』愛知県立芸術大学、2006年

¹⁵ 守屋は神奈川新聞に掲載された「わが人生」第39回で、愛知県立芸術大学で教えていた時《再現壁画》に携わったことから特別に学生を連れて堂内に入ったことを述懐している（平成2（1990）年1月23日付『神奈川新聞』所載）。

¹⁶ 昭和43年度の守屋の非常勤講師の採用に関する資料は、他に同綴内の、昭和43年1月16日開催美術学部教授会資料内、議題「43年度非常勤講師の委嘱について」添付資料（B4判、1枚）（同資料には、昭和43年を42年とする誤記あり）と、同年5月8日開催美術学部教授会資料審議事項「昭和43年度の非常勤講師の採用について」添付資料の最上段に「日本画」と記された資料（B4判、1枚）に関連する内容がみられる。昭和44年度については、綴『43.12.26～46 教授会関係綴』（B5判、黒表紙紐綴、背表紙に「43.12～46.3 教授会美術」とあり）内の、昭和44年2月5日開催美術学部教授会結果報告資料内、資料「昭和44年度非常勤講師予定」（B4判、1枚）と資料「日本画科昭和44年度教官授業・担当科目一覧」（B4判、1枚）に、昭和45年度については、同綴内の、昭和45年2月5日開催美術学部教授会結果報告資料内、資料「昭和45年度非常勤講師予定一覧表」（B4判、3枚）に、昭和46年度については、同綴内の、昭和46年1月20日開催美術学部教授会議事録内、資料「昭和46年度非常勤講師予定調書」（B4判、3枚）に、昭和47年度については、綴『□6.4.8～49.3 教授会関係綴』（B5判、黒表紙紐綴、背表紙に「46～49 教授会議事美術」とあり）内の、昭和47年2月2日開催美術学部教授会結果報告内、議題「国立に本務を持つ非常勤講師の採用について」添付資料（B4判、4枚）に依る。

¹⁷ 模写手本の作者としては、他に白岩圭介、篠崎美保子、滝沢具幸、上垣候鳥、小林済、井上耐子の名が残されている。このうち、滝沢と井上は、《再現壁画》の制作助手の一覧に名がみられる。また、《春日権現霊験記》や《北野天神縁起絵巻》の模写手本が収蔵されている（芸術資料館藏品図録編集委員会編『芸術資料館藏品図録』愛知県立芸術大学、1995年）。また、秦誠は、学生時代に模写手本の上に紙をあてて、上げ写しによって模写をする授業があったと述べている（2017年12月25日口頭にて）。

¹⁸ 昭和43年5月8日開催美術学部教授会資料審議事項「昭和43年度の非常勤講師の採用について」添付資料の最上段に「日本画」と記された資料（B4判、1枚）

¹⁹ 山崎一雄「法隆寺金堂及五重塔に使用された顔料の科学的研究」『美術研究』145号、1947年、同「法隆寺金堂壁画の顔料及びその火災による変化について」『美術研究』167号、1953年。

²⁰ 前出「愛知県立芸術大学蔵法隆寺金堂壁画模写についての考察—現状模写と復元模写—」、前出「法隆寺金堂壁画の「模写」」。

²¹ 前出『金堂壁画再現記念法隆寺展』

²² 《再現壁画》においては、模写の素地としてつなぎ合わさるコロタイプ印刷として、374枚が刷られたという（前出『金堂壁画再現記念法隆寺展』）。

²³ 枚数は、同封されている紙片のメモ書きによる。

²⁴ 前出『金堂壁画再現記念法隆寺展』。また、芸術資料館の中には「橋本班 8.9.11 法隆寺金堂壁画コロタイプ」とメモされた厚紙があり、同種の厚紙には「中身なし、梱包材」とのメモが残されている。朝日新聞社から寄贈された当初バラのコロタイプを包んでいた厚紙である可能性も考えられる。

²⁵ 前出『芸術資料館藏品図録』

²⁶ 前出「愛知県立芸術大学蔵法隆寺金堂壁画模写についての考察—現状模写と復元模写—」

²⁷ 前出「法隆寺金堂壁画の「模写」」

²⁸ 前出「愛知県立芸術大学蔵法隆寺金堂壁画模写についての考察—現状模写と復元模写—」。また、《再現壁画》でも同様に、金堂壁画で使用されているベンガラを再現するには今の朱でなければ表現できないといった意見が出されていたという（前出『金堂壁画再現記念法隆寺展』）。

²⁹ 前出「愛知県立芸術大学蔵法隆寺金堂壁画模写についての考察—現状模写と復元模写—」。座談会出席者として、布施伸介（教授）、月岡栄貴（非常勤講師）、後藤芳世（非常勤講師）、田中穰（客員教授）、林功（講師）、千村俊二・河合重政（卒業生）、山崎隆

之(助教授、司会)の名がある。座談会が行われた日時については記載がないものの、ファイル『運営委員会議事録綴/平成元年度起第51回4/20~H.2』内、平成2(1990)年1月8日開催第56回芸術資料館運営委員会議事録で座談会の実施決定と発表方法について議論し、ファイル『芸術資料館運営委員会議事録平成3~4』内、平成3年9月26日開催第64回芸術資料館運営委員会議事録内で実施された座談会のテープから起こした記録をどのように紀要に載せるか検討をしているため、この間に開催されたと考えられる。

³⁰ 前出「壁画を再現して」、安田鞞彦「壁画再現を終って」(前出『金堂壁画再現記念法隆寺展』)。

³¹ 前出『金堂壁画再現記念法隆寺展』

³² 法隆寺金堂壁画模写を保存できる収蔵庫建設を目指し作成した資料で、芸術資料館内に数部保管されている。ただし、記載内容には10号壁の模写制作者を吉田班とするなど、明らかな誤記がみられる。昭和62(1987)年12月31日付『中日新聞』朝刊によると、中部経済連合会の支援による収蔵庫の新設が決定したことが発表されている。

³³ 愛知県立芸術大学『愛知県立芸術大学法隆寺金堂壁画模写』愛知県立芸術大学、1988年

³⁴ 「広く古大家ノ傑作ヲ整列シ以テ美術ノ標範ニ供シ併セテ其沿革ヲ示スハ最も必要ノ儀」にあるものの「従来収蔵ノ品極メテ少ナク」本館陳列上ノ目的ヲ達シ難」いため「奈良京都ヲ首メ其他ノ地方ニ於テ彫刻絵画中名品傑作ノ模造ニ着手」することが記されている(佐藤昭夫「明治中期における博物館の彫刻模造事業について」『東京国立博物館研究誌』277号、東京国立博物館、1974年)。

³⁵ 前出「明治中期における博物館の彫刻模造事業について」、松浦正昭「よみがえる仏たち」東京国立博物館編『特別展模写・模造と日本美術—うつつ・まなぶ・つたえる—』東京国立博物館、2005年、佐藤道信「近代日本の模写・模造」(同前)。

³⁶ 高田良信「法隆寺金堂壁画史」(朝日新聞社編『法隆寺再現壁画』朝日新聞社、1995年)。模写については、古くは江戸時代の末に鬼頭道恭が行った6号壁の模写が昭和51年発見されたとの記録が有賀氏によって紹介されている(有賀祥隆「金堂壁画の模写と複製」法隆寺金堂壁画刊行会編『法隆寺金堂壁画: ガラス乾板から甦った白鳳の美』岩波書店、2011年)他、嘉永5(1852)年に浄土宗の高僧義鶴徹定が侍僧祐参に描かせた6号壁の想定復元模写が塩山市放光寺に現在も所有されているという(前出「壁画再現の夢」)。

³⁷ 前出「法隆寺金堂壁画史」

³⁸ 前出「金堂壁画の模写と複製」

³⁹ 法隆寺金堂壁画模写解説内(前出『特別展模写・模造と日本美術—うつつ・まなぶ・つたえる—』)。

⁴⁰ 前出「壁画再現を終って」

⁴¹ 佐々木直子「鈴木空如の法隆寺金堂壁画模写に関する文化財保護的立場からの調査」『鹿島美術研究年報第25号別冊』鹿島美術財団、2008年、前出「金堂壁画の模写と複製」。また、空如の法隆寺の来訪回数については、空如自身が語っているという(前出「鈴木空如の法隆寺金堂壁画模写に関する文化財保護的立場からの調査」)。

⁴² 前出「鈴木空如の法隆寺金堂壁画模写に関する文化財保護的立場からの調査」

⁴³ 前出「法隆寺金堂壁画史」

⁴⁴ 西村寿美雄「法隆寺金堂壁画写真原版 撮影と保存の経緯」『日本写真学会誌』79巻1号、2016年。後に失火により焼損する≪法隆寺金堂壁画≫の焼損前の姿を原寸大かつ緻密に伝える便利堂のコロタイプ印刷は、その学術的価値の高さから原寸大撮影、赤外線撮影、四色分解撮影の写真原版が2015年に重要文化財に指定されている。

⁴⁵ 1、5号壁 中村班(中村岳陵、吉岡堅二、新井勝利、真野満、我妻碧宇、野島青茲、森緑翠)

2、10号壁 荒井班(荒井寛方、藤井白映、鈴木三朝、座間素賢、中庭媛華、上垣候鳥、江守若菜、森田沙伊)

6、8号壁 入江班(入江波光、吉田友一、林司馬、吉田義夫、川面稜一、入江西一郎、多田敬一、赤松稜一、近藤千尋)

9、11号壁 橋本班(橋本明治、村田泥牛、吉田善彦、名古屋謙一、大山忠作、桑原清明、小寺禮三)

⁴⁶ 入江班のみコロタイプを印刷した和紙の上に更に模写用の紙を重ねてあげ写しを行ったとされる(前出「壁画再現の夢」、前出『法隆寺再現壁画』)。

⁴⁷ 『三彩』29号、美術出版社、1949年4月、仏教芸術学会編『仏教芸術』4号、毎日新聞社、1949年6月、東京文化財研究所美術学部(美術研究所)『美術研究』167号、吉川弘文館、1952年

⁴⁸ 伊藤廉「法隆寺金堂焼失」(前出『三彩』29号)

⁴⁹ その中には、助手として関わった近藤千尋が14名の選出画家として参加している(前出『法隆寺再現壁画』)

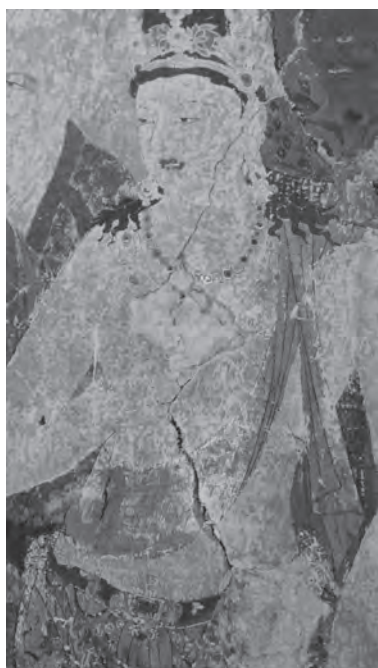
⁵⁰ 前出『金堂壁画再現記念法隆寺展』、石田豊尚「法隆寺金堂壁画備考—法隆寺展にちなんで—」『MUSEUM』207号、東京国立博物館、1968年、前出『法隆寺再現壁画』。



【図1】法隆寺金堂壁画模写 10号壁 愛知県立芸術大学蔵



【図2】法隆寺金堂壁画模写 10号壁 (部分)



【図3】法隆寺金堂壁画模写 10号壁 (部分)



【図4】法隆寺金堂壁画模写 6号壁 愛知県立芸術大学蔵